

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

御手洗悠紀

## 【所属】(助成決定時)

京都大学大学院 農学研究科

## 【研究題目】

戦間期ドイツにおける健康問題と初期有機農業

## 【研究の目的】(400字程度)

有機農業は「安心・安全な」農業として、今日関心を集めているが、化学肥料や農薬等、外部資材に依存する「資本集約型農業」(近代農業)を批判する有機農業の概念は1920年代のドイツ語圏およびイギリス帝国に生じたとされる。そこで本研究は、有機農業の系譜の一つである戦間期ドイツの「バイオダイナミック農法」(以下、BD 農法)に着目することで、初期有機農産物がどのような問題意識のもと生産・消費され、彼らの健康的な生のあり方を強化するために利用されていたのか、その全体像を明らかにすることを目的とする。BD 農法とは、人智学者ルドルフ・シュタイナー博士が1924年に行った連続講義「農業講座」に端を発するものであり、神秘主義的な性質を持つ。1941年にはナチスによって弾圧されることになるが、今日に至るまで続き、BD 農法を認証する農業団体「デメター」はドイツにおいてもっとも権威のある有機農業団体になっている。本研究ではとくに、当時の健康不安を背景に生じた「健康言説」がいかに彼らの食や農を規定していたかを明らかにすることで、有機農業の取り組みが拡大していく経緯を示す。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

上記の目的を達成するために、本研究はドイツ国立図書館(フランクフルト)および人智学団体本部(ドルナッハ)において資料調査を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、現地調査を行うことは断念せざるをえなかった。そのため、京都大学図書館経由で複写依頼を行い、ドイツ博物館、ベルリン州立図書館、バイエルン州立図書館など複数の図書館から雑誌資料の複写物を入手した。また、人智学団体にも連絡を取ることで、内部で発行されていた資料の目次を一部入手した。

収集した資料は下記の通りである。第一にBD 農法に従事する農家の活動を支えるためにデメター農業連盟(1930-1933)が発行していた月刊雑誌『デメター-Demeter』(1930-1941)が挙げられる。内容は主として、大学卒業資格や学位を保持する研究者による理論的論考と、BD 農法の従事者による実践報告である。第二に、『デメター』創刊以前に発行されていた月刊冊子『人智学協会の農業試験サークル通信 *Mitteilungen des Versuchsringes anthroposophischer Landwirte*』(1926/1927-1929)である。『デメター』が外部の人たちにも情報提供することを目的としているのにたいして、この雑誌は農業講座後に有志が結成した農業試験サークル内のメンバーでのみ共有された内部文書である。最後にBD 農業全国連盟(1933-1941)が発行していた月刊雑誌『身体と生命 *Leib und Leben: Monatsschrift für biologische Lebensgestaltung*』(1933-1943)である。同連盟はナチスの強制同一化政策によって生改革協会と統合されるため、生改革運動に関する雑誌となるが、『デメター』の姉妹誌として位置付けられる資料である。

本研究は掲載記事のみならず、投書欄や広告、講演会や集会等の報告文書にも着目することで、BD 農法をとりまく人々の言説分析を行う。

## 【結論・考察】(400字程度)

本研究は、上記の通り新型コロナウイルスの影響を受け、研究計画に大幅な変更および遅延が生じたため、未だ進行中であるが、現段階においては下記のことが明らかになっている。

①BD 農法の担い手：雑誌記事に掲載された実践報告を概観したところ、BD 農法にかんする活動の中心は

ドイツ北東部のグーツ経営者であったが、中には小規模な入植地による取り組みや、非人智学徒による BD 農法の取り組みも見られた。BD 農法が農業や園芸において早く普及したのに対して、畜産での取り組みには遅れがみられた。

②BD 農法従事者らの問題意識：BD 農法従事者は人造肥料の利用が土壌の酸性化をもたらし、結果として土壌内微生物を殺してしまうことを問題視していた。そして土壌劣化に伴って作物や家畜の病気が増加し、農薬や家畜の薬などを繰り返し購入することになり、外部依存が強化される悪循環を指摘した。こうした外部依存により農家は経営上の自立性を失うが、BD 農法は土壌肥沃度の回復というエコロジーの問題と、農家の経営の問題を両方同時に克服できると考えられた。また、病気の穀物や野菜を摂取することは、家畜や人間の病気につながると捉えられた。そして、健康的な身体に必要な高品質な食材をもたらす農業として BD 農法が位置づけられた。

③ BD 農法への転換とその障壁：農家の自立とは、シュタイナーの主張した「閉じた有機体」として、農場内で物質循環が完結していることを意味していたが、しかしそのためには家畜を飼育する必要があった。BD 農法では牛糞に優位性が置かれたため、大型家畜である牛を飼育するための放牧地と厩舎が求められ、それは BD 農法への転換における障壁となった。また、BD 農法による生産品の流通は、一般の市場ではなく、生産者と消費者が直接結びつく形が模索された。ただし消費者の需要確保は難しく、安定した流通経路の確保は課題であった。とくに恐慌時において、都市の消費者には高価な BD 農法が生産品を購入するための購買力がなかったと考えられる。